

Other voices, Other rooms behind the Trump.

「トランプの裏にひそむ、『遠い声 遠い部屋』の叫び」

(トルーマン・カポーティ『遠い声 遠い部屋』 / 訳者：河野一郎 / 新潮社 1971年)

東 みちよ

2016年11月に行われたアメリカ大統領選挙。ドナルド・トランプの勝利に世界は驚きを隠せなかった。アメリカ主要メディアをはじめ世界の大半は、トランプの劣勢を予想していただけに想定外の出来事として報じられた。

しかし、本当にそうだろうか？

私たちは、世界は、アメリカの声なき人々から、あまりにも遠ざかっていたのではないか？トランプを支持したのは「声なき中間層」、サイレントマジョリティと言われる。いわゆる白人の貧困層で、アメリカ中西部、南部には数多く存在し、彼らはトランプを熱烈に支持したと報じられている。

そこでアメリカ南部の静かなるマジョリティとは何なのか、その根源にある精神を文学から探してみたい。本論は、南部で幼少期を過ごしたトルーマン・カポーティの自伝的作品ともいわれる『遠い声 遠い部屋』に、その解を求めるものである。

陸の孤島、ヌーン・シティと南部構造

まず、南部の人々の精神を知るには、その場所について把握する必要がある。『遠い声 遠い部屋』の作品の舞台となるのは、南部の架空の町、ヌーン・シティである。作品の冒頭の3行に、陸の孤島ともいえるこの町の閉塞感が凝縮されている。

“ヌーン・シティへ行こうと思う旅行者は、今のところ何とか自分で方法を講ずるより他に手が無い。バスも汽車もその方角へは通じていない。もっとも隣町のパラダイス・チャペルへは、週に6日、チャペレイ・テレビン油会社のトラックが郵便物の受取りと物資の補給に來ている。”

交通の不便極まりない場所でありながら、教会へは何とか通うことができる。閉塞感から抜け出す道は、神に通じるといふ構造がうかがえる。日常にしばしば「教会」が登場する信仰の深さは、南部の精神を語る上では欠かすことができない。

「神は汝に才能を与え賜うとき、汝自身をうつつための鞭も同時に与え賜う」（トルーマン・カポーティ インタビュー*1）とカポーティ自身が語っているように、閉塞感と、そこに救いを求めるための信仰は背中合わせに存在している。

ヌーン・シティの町には寂れた個人商店が並んでいるが、それらを圧倒するように二つの建物が象徴的に立っており、南部の精神を可視化させるものになっている。一つは、高く奇妙な刑務所で、もう4年以上も白人の犯罪者を収容したことがない。つまり黒人のみが囚人として扱われる。もう一つは北軍に犯され、殺された姉妹がいたという怪奇な屋敷だ。リンカーンの奴隷解放から100年あまりを経っても、南部の小さな町では、黒人が奴隷として描かれている。また南北戦争の北軍への憎悪は、幽霊となって町に残っている。

つまり南部の精神の根源にあるのは、閉塞感から抜け出すための信仰という逃げ道であり、また南北戦争の過去から現代へとつながる北の革新なるものへの遺恨なのである。そうした声にはならない彼らの心の叫びを知らずして、トランプ勝利の背景を理解することはできない。

アメリカ文学史における“南部ゴシック”と呼ばれる小説は、こうした南部特有の地理的閉塞感や、南北戦争以降も消えることのない精神の遺恨が、ゴシック特有の陰鬱さを生む土壌にもなっている。カポーティの小説には、南部作家として知られるウィリアム・フォークナーの影響が見られるが、フォークナーの「場所」に対する思考は、カポーティにも受け継がれている。フォークナーの『響きと怒り』(1929年)に関する評論で山田信也氏は、フォークナーの「場所」の特徴は、古き良き南部の栄華への郷愁、敗戦による喪失感、北部に対する対抗心、そして奴隷制に対する良心の呵責等の屈折した身上を内在させたもの(*2)と定義づけている。過去が現在に連続し、時間を超越した“南部”イメージがそこに描かれ、この手法はカポーティの作品にも生かされている。

そもそもこの作品は、カポーティの幼少期の思い出をもとに描かれた自伝的小説だと言われているが、このヌーン・シティもまた、カポーティが子供時代を過ごしたアラバマ州の小さな町、モンローヴィルをモチーフに描かれている。『子供時代への懸け橋—トルーマン・カポーティのアメリカ南部時代』(マリアン・M・モウツ*3)では、ヌーン・シティの舞台となるモンローヴィルについて、カポーティの幼なじみの回想により詳細が解説されている。

“アラバマ州の小さな町モンローヴィル(人口約7,500)は、「中心軸(ハブ)」という呼び名で知られている。というのも、どの方角へ向かおうとも、規模の大小を問わずたにかく町らしき町に辿り着くためには、車で二時間走らなければならないからである。”

カポーティはこのモンローヴィルで1924年に生まれた。高貴な名門の家に生まれながら、奔放な母親によって道は狂い始める。離婚した母はカポーティを田舎に置き去りにし、親族

に預けて去ってしまう(*3)。そうした幼少時代の孤独感や、他人に頼らざるを得ない子供の処世術は、そのまま作品の主人公である少年、ジョエル・ハリソン・ノックスに投影されている。

しかし自立に目覚めた子供、ジョエルを迎える南部の町、町の人々は容赦ない。町の男たちは、華奢で色白で小賢しい少年、小さな異邦人を受け入れがたい態度で迎えるが、ジョエルは叔父を南北戦争の英雄と嘘ぶくことで、仲間として受け入れられるようになる。

“このトランクはね、ぼくのおじいさんのだったんだよ。ノックス少佐って、きつとおじさんも歴史の教科書でならったはずだよ。南北戦争の大立者だもの”

遠い部屋から逃れる者、隠れる者

南部の小さな町、ヌーン・シティはまるで鳥かごのように住人たちを囲う。鳥かごの中には、2種類の人々が存在する。鳥かごの中で息をひそめるようにして隠れる者と、かごから逃れようと必死でもがく者たちだ。

殺人という犯罪を犯しながらも、屋敷で趣味に没頭し、人々と交わることを嫌う養父、ランドルフ。言葉を失ったままベッドに寝たきりの父親、サンソム。隠者の彼らはみな没落した白人たちだ。一方、貧しいながらも鳥かごのような閉鎖的な町から脱出を試みるのは、黒人奴隷や、世間の常識に馴染むことのできない者たち。黒人の少女、性同一性障害の少女、サーカスの美しい小人、そしてカポーティ自身でもある主人公ジョエルだ。

逃れる者たちは、みな、南部への違和感を「残酷なまでの暑さ」「溶けちまいそうな暑さ」と表現する。カポーティは南部特有の鬱陶しさを、皮膚感覚にたとえて、南北の対比を浮き

彫りにしている。逃れる者たちは、暑さから解放してくれる北を目指そうとするが、結局それは蜃気楼のようにさまざまな夢を打ち砕く。

そうした逃れる者たちに対して、蔑むような目を向ける隠者こそ、南部白人の心の奥にひそむ本質ではないか。「いいかい、幸せというのはね、相対的なものなんだよ」とジョエルを諭そうとする養父は、鳥の羽根を貼付けた厚紙を手に、どの羽根にも特別の位置があると語る。たとえ飛べなくても、決まった位置に整然とあることこそが、重要であると。それは南部の人々が、たとえ不自由さや、貧困という問題を抱えていたとしても、そこにいることこそが意味があるという「場所」に囚われていることに他ならない。

PRRIの調査(2016年10月6日)によれば、アメリカでは「地理的なモビリティ(住居を移動すること)が白人有権者の投票行動に影響を与える」という。生まれた町に住み続けている白人の57%がトランプ支持であり、生まれた家から自動車ですぐに2時間以内に住んでいる白人の50%がトランプ支持、31%がクリントン支持だそう。それは教育の違いを示し「生まれた町に住んでいる白人の53%は高校以下の教育しか受けていない」と指摘する(*4)。

サイレントマジョリティの静かなる“遠い声”を叫び声に変えたのは、何だったのか。声なき中間層といわれた白人貧困層は、時間を越えた「場所」の呪縛から抜け出せずにもがいている。カポーティが描いたこの「場所」にヒントを見出すなら、遠い部屋には真実は存在せず、ただ鏡があるだけだ。果たしてトランプの裏側には、真実はあるのか？ カポーティの描いた南部という「場所」が今も変わらないとしたら、彼らは過去と現在をつなぐ、鏡の

向こうの幻想を夢見ているのではないか。

*1 トルーマン・カポーティ インタビュー 『ヴォーグ』 (1979)

*2 『アメリカ南部の文学と映画』 (山田信也 近代文芸社 1994)

*3 『子供時代への懸け橋—トルーマン・カポーティのアメリカ南部時代』 (マリアン・M・モウツ/ 大園弘訳 英宝社 2006)

*4 中岡望「米大統領徹底分析 14」 (yahoo news 2016/11)